



上野国分寺が建てられた場所

上野国分寺は榛名山の東南麓、国の支配を行う役所である国府の北西の地が選ばれ、西に僧寺、東に尼寺が並び建てられました。この地は上野国のほぼ中央に位置し、西に妙義・浅間、北西間近に榛名、北に小野子・子持、北東に武尊・赤城の山々を望め、南から南東にかけては視界をさえぎることのない平野が広がる絶好の場所です。「好辯」を選んで長く久しく保つように」との詔のとおり、今でもその景観を感じることができます。

周辺には大規模古墳群（保源田古墳群・總社古墳群）や豪族居館跡（三ツ寺1遺跡・北谷遺跡）など古墳時代の重要遺跡のほか、古代の有力寺社（山王廟寺跡・總社神社）、中近世に地域の拠点となった城館跡（葛海城跡・前橋城跡）などが分布します。この地は古墳時代以来、上野国の政治・文化の中心地でした。

交通のご案内

- 徒歩 JR上越線群馬總社駅または新前橋駅から約3.5km
- バス ・群馬バス前橋駅発インター高崎 約見事下車北へ徒歩5分 ・関越交通バス前橋駅発金古王塚台団地 約見事下車北へ徒歩7分
・高崎市内循環バス「ぐるりん」其輪城線 上野国分寺跡前下車
- 自動車 関越自動車道前橋インターチェンジから約10分・利府スマートインターチェンジから約15分
・JR高崎駅から約30分・JR新前橋駅から約15分・JR前橋駅から約25分
駐車場は史跡地の南方、西毛広幹道からアクセスする「天平の道駐車場」をご利用ください

ガイドバス施設「上野国分寺館」のご案内

ガイドバス施設には発掘調査成果の紹介とともに、1/20の大きさで復元した七重塔の模型などを展示しています。また、解説ビデオなど映像資料もあります。解説員が見守っており、いつでも説明を受けることができます。入場は無料です。ぜひ、お出かけください。

・開館時間 午前9時30分～午後4時30分(入館は午後4時まで)

・閉館日 年末年始(12月29日～1月3日)

・問合せ先 群馬県地域創造部文化財保護課 027-226-4684
ガイドバス施設「上野国分寺館」 027-372-6767



令和3年2月22日改訂



史跡上野国分寺跡

National Historic Site Kouzuuke Kokubunji Temple Ruins

上野国分寺とは

天平13年(741)、聖武天皇によって國分寺創建の詔が発せされました。仏教の力によって災害や疫病、外敵を防ぎ、五穀豊穣を祈ることで國の安泰をはかる鎮護國家思想に基づくものでした。寺は國分僧寺と國分尼寺の二寺制とし、國分僧寺は「金光明四天王護國之寺」として七重塔を建て、金字で書寫した護國經である「金光明最勝王經」を安置しました。地方において、これまでにない高層建築物である七重塔を備えた國分寺は、まさに「國の華」でした。

年代	主なできごと
538(欽明天7)	百濟國より仏教が伝わる(仏教公伝)
7世紀	愛宕古墳・宝塔山古墳・蛇ヶ山古墳(前橋市)が造られる
(後半)	山王廟寺(般若寺と推定)が創建される
681(天武10)	放光院の僧連利が亡き母ため供養塔を建てた(山上寺・高崎市)
701(大宝元)	大宝令が改められる
711(和銅4)	多胡別院が建立される(多胡寺・高崎市)
726(神亀3)	三藏院が信仰共同体を結び、先祖供養と一族繁栄を祈ることを誓う(金井寺・桐生市)
741(天平13)	聖武天皇により國分寺創建の詔が発せられる
743(天平15)	聖御天皇、大仏建立を発願
749(天平勝宝元)	碓氷川の豪族石上郡君猪弟と勢多郡の郡司上毛野田足人が上野国分寺の建立に協力したことにより外從五位下の位を授かる
752(天平勝宝4)	東大寺で大仏開眼供養が行われる
801(延勝20)	僧連利が石造の宝塔を造立し、写經した經典を納める
817(弘仁8)	坂東村の東固田道の途中、上野国(藤岡市)に瀕在し民衆を教化
818(弘仁9)	上野郡など坂東諸国に地震がおこり大きな被害を受ける
939(天慶2)	平将門が上野守府を攻撃し、国司を追放し新京と称す
1001(長保3)	このころ上野国司平重義が十一面觀音像を造立し國分寺金堂に奉納
1030(承元3)	このころまでに築垣・門などの外郭施設、僧坊などが失われる
1108(天元3)	援護山が大噴火し国内の田畠烟塵と伝えられる。上野国分寺にも灰石が降り積もる
14世紀後半	このころ草堂付近は墓地となる

発掘された上野国分寺跡

発掘調査は昭和 55(1980)～63 年度(1988)の 9か年にわたる調査(第1期)、平成 24(2012)～28 年度(2016)の 5か年にわたる調査(第2期)の、大きく 2 時期の調査が行われています。近年の第2期調査では、これまで不明であった中門・回廊の位置が初めて確認されたほか、100 年近くにわたって金堂とされてきた建物跡の前面で本来の金堂が発見されました。その結果、上野国分寺は塔が回廊の外に置かれる伽藍配置であるものの、塔と金堂が東西に並び建つ特徴的な配置であったことが明らかになりました。こうした伽藍配置の例は多くありませんが、陸奥・近江・但馬の国分寺で見られます。



(南から) ① 鐘樓
（南から）3×2間の南北棟の掘立柱建物で、人が立っているところが柱穴の位置になります。奥の黒く見える土は版築層で、基礎建物から規模を縮小して掘立柱建物へ建て替えたことが分かりました。梵鐘の重さに耐えられるよう柱間を狭めた可能性があるため、鐘楼と推定されています。



(北から) ② 金堂
（北から）建物北東角部分の掘込地業（地盤を強化するため建物の範囲を一度掘り込んで固く埋め戻す（版築）基礎工事）が確認されました。南西部では耕作の邪魔になるため穴を掘って地下に落とし込まれた径 130 cm の礎石も見つかっています。



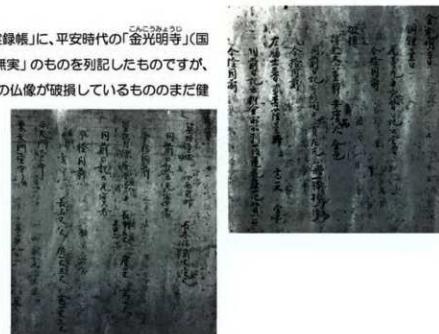
(南から) ③ 中門
（南から）東西 50 尺（15 m、人のいる範囲）・南北 40 尺（12 m）の掘込地業の全体を確認しました。中央を壊す壇の東斜面では、すり落ちた礎石 2 個が見つかっています。回廊との取付きには東西ともに布施地業（柱 1 列分を立てるための縦長い掘込地業）が見つかりました。



(北から) ④ 回廊
（北から）東南角にあたる、逆 L 字状に並ぶ内側柱列の礎石（礎石の下にしく石組）列を確認しました。桁行は 10 尺（3 m）等間です。内列と外列がそろって見つかった箇所がなく梁行は不確定ですが、西面で外側柱列の根石列が見つかっており、図上復元から 15 尺の単廊であった可能性が高いと考えられます。

古代の記録に見える上野国分寺跡

長元 3 年(1030)に作成された「上野国交替実錄帳」に、平安時代の「金光明寺」（國分寺）の状況が記載されています。「破損」と「無実」のものを列記したものですが、塔や金堂・講堂の記載が見られないことや多くの仏像が破損しているもののまだ健全な姿を保っていることから、これらは無実とならず残っていた可能性が推定できます。



復元された上野国分寺跡

第 1 期の調査研究結果に基づいて、平成 2(1990)～5 年度(1993)にかけて塔と講堂の基壇、南辺築垣の一部が復元されました。



七重塔を支えていた基壇です。心龕を含む 15 個の礎石と土壇の高まりが残っていました。礎石 2 個を追加し、基壇外装の切石を並べて住時の姿を復元しました。初層の柱間は 12 尺等間で一込 10.8 m、高さは 60.5 m あったと推定され、全国最大級の規模を誇りました。



8 個の礎石と土壇の高まりが残っていました。金堂として復元されましたが、第 2 期調査で本来の金堂が確認されたことから講堂であったことがわかりました。本来の基壇は、もう少し小さい規模で高さも 2 尺（現状 3.5 尺）であったと推定されています。



古代と同じく、手作業で棒でつき固めて土を積み上げる版築工法で復元されました。当時寺院の四周を囲っていたことが「上野国交替実錄帳」に書かれています。1 カ所あたり 4 t の重さがあります。空いている場所には南大門が建っていました。